

略歴書

佐藤 清隆（さとう きよたか）

（一財）電力中央研究所
地球工学研究所 上席研究員、博士（工学）



【専攻分野】地盤耐震、地震工学

【本会活動】

理事（会計担当）：2008年6月～2010年5月

法人化検討委員会・法人化準備委員会 委員：2008年6月～2010年5月

役員候補推薦委員会 委員：2015年6月～2018年5月

【略歴】

1982年 山口大学工学部土木工学科卒業

1984年 京都大学大学院工学研究科終了

1984年 （財）電力中央研究所入所（耐震構造部）

（1990年～1991年 ニューヨーク州立大学バッファロー校土木工学科客員研究員）

（2002年 京都大学工学研究科 博士（工学）修了）

（2001年～2003年 文部科学省地震調査研究課調査員）

2005年 同 地球工学研究所地震工学領域リーダー

（2012年 土木学会フェロー会員）

2015年 （一般）電力中央研究所 広報グループスタッフ

2018年 同 地球工学研究所スタッフ

現在に至る

【委員会活動（直近5年間）】

- ・土木学会地震工学委員会幹事長（2005年4月～2007年5月）委員（2007年6月～現在）
- ・日本電気協会原子力規格委員会地震・地震動検討会 委員（2003年4月～2015年6月）
- ・日本電気協会火力専門部会耐震設計規程改定作業会 委員（2008年4月～2018年3月）
- ・文部科学省地震調査研究推進本部強震動評価部会 委員（2005年7月～現在）

【著書および主要論文（代表的なもの10編以内）】

- ・「地震動研究の進展を取り入れた土木構造物の設計地震動の策定法ガイドライン（案）」
土木学会地震工学委員会（2009）共著

- ・「変電設備仕様の国際化」 社団法人電気共同研究会(2008)、第 63 巻第 4 号共著
- ・「地震動のローカルサイトエフェクト」 土木学会 (2005) 編共著
- ・「エネルギー技術者のための地盤・耐震学」 丸善 (1999) 共著
- ・ Assessment of the vertical distribution on seismic ground motion, Journal of Soil Dynamics and Earthquake Engineering, No19, pp.413-433, May 2000.
- ・事例調査に基づく砂礫地盤の液状化発生条件の検討、土木学会論文集 No.666/III-53(2000) 共著
- ・ Evaluation for local site effects of sedimentary basin taking into account incident wave field, Structural Eng./Earthquake Eng. JSCE, Vol16, No.2, 87s-99s, July 1999.
- ・ NONLINEAR SEISMIC RESPONSE AND SOIL PROPERTY DURING STRONG MOTION, Japanese Geotechnical Society, SPECIAL ISSUE OF SOILS AND FOUNDATIONS, pp.41-52, Jan 1996.

【所信】

役員候補推薦委員会よりご推薦いただき、この度、立候補することにいたしました。私は、本会発足時からの会員です。設立時の発起人の先生方は、日本を代表する地震工学の世界的なオーソリティという存在で、私にとって雲の上の人に喩えるに相応しい人物ばかりです。ですので、今回私が立候補するというのは、ここに至っても現実でないような不思議な心地です。

私は、これまで本会を含め諸学会の委員会活動を通じて、耐震設計の指針や規程などの策定や改訂に関する作業に係わり、電気事業の範囲にとどまりますが、土木工学の分野を超える電気・機械工学系の方々と議論する機会を経験いたしました。東日本大震災以後は、本会の委員会活動から遠ざかりましたが、原発事故を踏まえた原子力発電所の耐震設計や、南海トラフの広域災害への対策や防災に係わるシンポジウム等には必ず出席させていただきました。

本会は、地震工学に関連する各分野の研究を横断的にとらえる共有基盤にもとづき、地震災害の軽減に貢献し社会に求められる学会としての事業推進を使命とすることと理解しており、開催される行事での発表を一度聞くと各専門分野によるレビューを即座に習得できることが、会員を含め多くの方々に共感され、私自身も参加するモチベーションであったかと思えます。

上記のような本会のミッションや、地震工学・地震防災研究を通じて減災に貢献するという有益な活動で本会のポテンシャルを持続することは当然のことと思えます。これをベースに、会員の方々が日夜研究で取り組んでおられる地震環境、社会インフラ等やそのネットワークとなるライフラインを構成するものやシステムが今後更にデジタル化されていくように、社会環境が急激に変化する中で、当会の立ち位置を示し、時代変化に即応しやすい若手会員と私のようにあまりデジタル化のスピードに乗れていない年輩の会員が、どのように交流して社会に対して臨機応変に行動していくかが今後の課題ではないかと個人的に思っております。選出された際には、みなさまのご意見を賜りながら、当会を活発に持続できる有益な行動の方向性を議論し運営できるよう、将来の発展に尽力させていただきます。